

三野町の峠道と生活空間

民俗班 (徳島民俗学会)

橋 禎男*¹ 磯本 宏紀*²

1. はじめに

県の北西部に位置する三野町は、総面積43.33km²で、山林と原野が全体の73%を占めている。

周囲は、西を三好町、南は三加茂町、東は美馬町、北は香川県仲多度郡 仲南町と琴南町に接している。南は吉野川に面しているが、西と北の境界線は全て山の尾根上にあつて、最高地点は大川山 (1042.9m) である。

交通路は、徳島自動車道と主要地方道鳴門池田線が南部を東西に延びており、中央部を南東に流れる河内谷川に沿って県道琴南三野線がある。

本稿の第2章は、徒歩が主な交通手段であった時代の峠道に焦点を当てて、そのルートと現状、並びに峠道に残る石造物を主とした民俗文化財を明らかにした。また、第3章は、三野町における交易関係に関する一事例を報告するものであり、太刀野山字井ノ久保を中心に据えた視点から、交易路とその変化の一断面を示していく。その上で、第4章で三野町の峠の特徴を示してまとめる。

なお現地調査は、平成14年10月10日から平成14年12月15日までの間の12日間に、三野町太刀野山の井ノ久保、馬瓶、滝ノ奥、大平、中屋、芝生、香川県仲多度郡仲南町塩入で行った聞き取り調査に基づくものである。

2. 三野町の主な峠 (図1)

1) 滝ノ奥峠 640m

滝ノ奥集落が県境に接するように存在する。地名

の由来となった竜頭、金剛の二つの滝に沿って峠道があり、40年位前までは、金比羅詣りや借耕牛を追った人々が通っていた。旧道登り口には滝寺と鴨宮番所跡がある。

峠近くに「不動尊」らしい文字を刻んだ石造物があり、地元では「お不動さん」と呼んでいる。また滝ノ奥を開拓したという峯の兵衛の墓と板碑が峠の1kmほど西にある。

2) 真鈴峠 635m

阿讃の交流上重要な役割を果たした峠で、大屋敷や日浦から上る旧道は今も残っている。峠には、真鈴側に城村神社と地藏尊があり、大屋敷側には山野神社がある。旧峠の南東500mに両県を結ぶ車道が通じている。

3) 白井峠 845m

白井と琴南町勝浦を結んでいた。太刀野山は勝浦にある長善寺の檀家が多く、峠道は飛脚道としても使われていた。石造物はない。

4) 大川越 940m

峠道は、大川山山頂の西側を巻いており、大平と琴南町中通を結んでいた。山頂にある大川神社本殿裏に、不動明王が西向きに立っている。

5) 笹ノ田尾 980m

柞野越ともいい、大平と琴南町柞野を結んでいた。「中世から阿波と讃岐の交易道として賑わい、多くの僧や武士、農民が行き来した」と記した標識が峠の南に立っている。一帯は大平の農家によるイチゴ栽培が盛んである。石造物はない。

6) 櫻ノ休場 850m

* 1 徳島市国府町日開42-5

* 2 徳島県立博物館



図1 三野町の峠道

二本杉ともいう。この峠を通るコースは、中屋・井ノ久保線、田野々・馬瓶線、三好町からの山口・笠梅線があったが、最も多く利用されたのは中屋・井ノ久保線であった。このルートは「金比羅街道」ともいわれ、芝生から明神を経て中屋の尾根道を通り、峠を越えて塩入に下り金比羅に通じる道であった。また讃岐から米、塩や海産物、阿波から木炭や煙草等が人に担がれた運ばれた道であった。

さらに、借耕牛や讃岐へ嫁ぐ花嫁、善通寺の連隊に入営する兵士らを見送った道でもあった。峠からは、眼下に満濃池を望むことができる。

中屋、栗林、井ノ久保には、常夜灯（図2）が合



図2 中屋の常夜灯



図3 井ノ久保にある道標

わせて5基あり、その内4基に金比羅街道を示す「金」の文字が彫られている。また、井ノ久保の尾根道には2基の道標が残っており、一つに「金比羅右芝生道」、他に「左芝生村船場道」と刻まれている（図3）。これらの石造物は、昔の街道の賑わいを物語る貴重な文化財である。

7) 寒風 780m

三好町葛籠と馬瓶の境にある。地形や両町での聞き取りによる利用状況から峠と考えられるが、地元では単に「寒風」と呼んでいる。地名の由来は、冬季、峠に立つと寒い風にさらされることから名付けられたもので、美馬町や神山町では「寒風越」の名がついている。峠の300mほど北に、「水谷の地藏さん」と地元で呼ばれている地藏尊（図4）を祀ったお堂があり、その前の手水鉢に「明和四年（1767）寅十月廿四日」と刻まれている。



図4 水谷の地藏尊

8) 宮谷越 650m

三好町宮谷と田野々を結んでいたが、近くに林道が通じたので廃道になった。石造物はない。

（橋 禎男）

3. 山村の生活空間 —井ノ久保地区の事例—

1) 地区概要

井ノ久保地区は太刀野山に属し、松尾谷川の東、西向きの斜面に開けた集落である。明治初めには27戸であったが、現在8戸になっている。その8戸の内、3戸が大正から昭和初めにかけて馬瓶から移住してきた家である。井ノ久保は、馬瓶、土釜と同じ常会である。

生業に関しては、とくに近代以降、建築用資材としての竹材出荷や煙草生産、炭焼き、借耕牛を生業とし、現金収入を得る家が多かった。現在高齢者が多く、煙草生産を行う家が数軒のみである。

2) 結婚・通婚圏と噂話

事例1 (H氏は昭和2年生まれ)

H氏の祖母は嘉永年間に碁要^{ごよう}から嫁いできた。母親は馬瓶から来た。そして、H氏の妻は三好町葛籠^{つづら}からであった。

事例2

M家でも馬瓶から嫁いできた。そのほか、とくに大正期、昭和初期には馬瓶から嫁いできた女性がほとんどであった。

事例3

昭和初めの話だというが、K氏が18歳の頃、親の薦めで栗林の女性と結婚した。その頃、K家に女中奉公で馬瓶から来ていたT氏(当時15歳くらい)に惚れ込み、妻を実家に帰らせた。しかし、T氏のなじみでK氏の従兄弟(馬瓶)もT氏に恋愛感情をもち、K氏との間でT氏をめぐる争った。ある時、K氏は意を決し、野良仕事の終わった夕方に「をうめし(筆者注:ようめし=夜飯の誤り)を食うたら出てこい」という手紙を出し、T氏を夜連れだし、駆け落ちした。そのまま琴平の親戚の所に行き、親にもT氏との結婚を認めさせた。後日、T氏のところにあった誤字のある手紙が家の人に見つかり、笑い話になった。

事例4

昭和初めの話だが、親の薦めでY氏は大平の名家からきた妻と結婚した。しかし、Y氏は妻を嫌って毎夜のように床を拒んだ。そしてついに「家を普請するから実家で金を貰って来い。貰うまで帰るな。」と言って妻を追いかけ、そのとき既に恋愛関係にあった中屋の女性と再婚した。

事例5

R氏にも馬瓶からの妻があり、子もいた。しかし、妻が気に入らない。隣りの家の娘に惚れ込んでいた。その娘が野良仕事をしていると、急にR氏がやってきて、横抱えにして山まで娘を連れて走った。後日、娘に「良かったか」と尋ねると、「それは、それは…」と顔を赤らめたという。

3) 馬瓶との情報伝達

井ノ久保は松尾谷川を挟んで東側、馬瓶は西側であり、向かい合う。昭和20年頃には谷を挟んで声を掛け合うことで、馬瓶との連絡を取っていた。

たとえば、井ノ久保で農作業での手伝いが必要なとき、また祭りの日取りを呼びかけるとき、目標とする家が見える場所に行っては大声で知らせていた。姿は見えないが、馬瓶からも声が返ってくる。当然ながら、こうした情報伝達の手段は、電話が引かれると使われなくなった。

4) 金比羅街道

(1) 塩入への道

井ノ久保から琴平方面には金比羅街道を経ていく。井ノ久保地区でいう金比羅街道は、中屋地区に発し、井ノ久保集落の上を通り抜け、途中、谷向いの田野々、馬瓶を抜けてきた道と合流した後、榎ノ休場に至る。そのまま峠を越え、下ると讃岐の仲南町塩入に至る。

(2) 借耕牛

明治～昭和初期頃にかけて、井ノ久保の多くの家では農耕用の牛を飼った。6月半ば、牛を連れ、この金比羅街道を通って塩入へと向かった。この頃、讃岐の塩入には馬喰^{ばくろ}が集まり、牛の貸し借りの中継地となっていた。20日程牛を貸し出すだけで「正月ができた」というほどの収入であった。

(3) 木炭や竹材の出荷

井ノ久保では昭和60年頃まで冬には炭焼きが行われた。その出荷は金比羅街道を越えた塩入に出荷した。背負い梯子で炭俵を背負い、峠を越えた。早朝に井ノ久保を出、榎ノ休場、焼屋敷、中山といずれも泉のある場所で休憩しながら昼前には塩入に入った。塩入では「炭を卸し、塩を買う」とも言われたが、そのほかにも米や日常の買い物をして帰った。

明治から昭和20年代までの話であるが、井ノ久保から建築用資材として真竹も出荷していた。四間程の長さの竹2本を横棒3本で固定し、その中央の棒を担いで塩入へと向かった。こうして徒歩で塩入に向かったのは自動車の入る道が開通する以前であり、昭和30代までのことだった。

(4) 見知らぬ通行者たち

江戸時代の話として井ノ久保に伝わる伝説があ

る。大声をあげながら5、6人の「ならず者」が刀を差し、その鞘先にはコマをつけて琴平方面に歩いて行った。琴平にあった侠客屋を目指していたのだという。

また、昭和30年頃、実際にあったとされる事件も語られる。金比羅街道を色白の普段見かけない若い女性が通ったというのである。この女性は井ノ久保を過ぎると草むらへと入っていったのだが、その通ったあとは草が枯れ、ウジがわいていたのだという。そのため、その女は蛇の化身ではないかと、また街道の下の方にある土釜の釜淵に住む蛇であると解釈されている。

(5) 金比羅詣り

金比羅詣りの人もこの道を樫ノ休場越えの道を通った。井ノ久保でも、ムラの伊勢神社で3日程お籠もりした後、徒歩で塩入を抜けて金比羅詣りをしていたと伝えられている。

また、昭和18年、19年頃には多くの人が戦勝祈願のために金比羅山に詣った。このとき、徒歩で塩入まで行き、歩いて塩入から鉄道を利用した。

5) 出掛ける

(1) 芝生へ向かう

昭和初期に芝生へ向かうのは、タバコの出荷と祭りや正月の買い物であった。タバコの専売所が金比羅街道を越えるとき、牛の背で荷物を運ぶことはなかったが、芝生へは牛を連れていった。

(2) 飛脚道

井ノ久保全戸が香川県琴南町にある長善寺の檀家である。葬式を出す際、長善寺にも飛脚を送った。飛脚は東方向に栗林、碁要から白井峠を越えて長善寺に至る。井ノ久保では、この峠越えの道のことをとくに飛脚道と呼ぶ。

6) まとめ

以上であげてきた事例はすべて直近の過去としての事例であり、近代という時代背景の中で、しかしそれ以前からの蓄積された歴史の中で成立していた交易路である。その特徴は、個人で異なる通婚圏、出荷先の状況で異なる煙草と木材・木炭の出荷先、経済関係とは別の飛脚道等の事例から、生活のそれ

ぞれの局面での多様な生活空間をあげることができ。従来、阿讃峠越えのルートが盛んに取り上げられてきたが、それだけでない交易路の存在にも着目する必要があろう。(磯本宏紀)

4. おわりに —三野町の峠の特徴—

1) 本町は、前年調査の佐那河内村とほぼ同面積で、山地の割合もよく似ているが、後者の15峠に比べて、本町の峠は8峠であった。これは地形や交流圏の相違によるもので、本町の峠道は殆どが北と北西に延びており、讃岐との交流が主であったことを示している。これは米や塩等の入手が、讃岐の方が容易であったことによるのだろう。

2) 石造物は8峠の内4峠にあったが、いずれも峠から少し離れた位置にあった。これは峠で休んで前途の無事を祈るといった峠の機能の一つが、他に比べて少なかったからではなかろうか。

3) 先に述べた太刀野山の金比羅街道に立つ常夜灯や道標は、この峠道を利用した他村の人々に大きな安心感を与えたと想像できる。これらは旅人に対する本町民の温かい心を表したもので、これらの石造物や峠の景観を生かした、歩く人のための歴史の道の復活が今後の課題であらう。

謝 辞

今回の調査に際して、多くのご教示を賜りました。地元三野町の西川博文、竹重光雄、中山正樹、嵯峨原寛、小笠美幸、梶川重雄、千葉勲の各氏に深く感謝いたします。

参考文献

- 岡 泰 (1986) : 『阿讃峠みち 地理・歴史編』私家版。
 琴南町誌編纂委員会編 (1986) : 『琴南町誌』琴南町。
 徳島県三好郡郷土史研究会編 (1998) : 『三好郡の石造文化財』同会。
 三野町誌編集委員会編 (1974) : 『三野町誌』三野町。
 三宅清一 (1996) : 『わが祖 わが村』私家版。